優秀修士論文概要

探偵小説雑誌『宝石』の一九四六年

ベント　勇亮ヘンリー

本修士論文は、探偵小説雑誌『宝石』の創刊年である一九四六年に着目し、その誌面に捉えられた同時代言説の分析を通して、敗戦直後の日本における言説空間の編成の一端を探偵小説雑誌という大衆的なメディアから再考したものである。

従来の探偵小説研究でも指摘されているように、探偵小説には犯行動機やトリックといった作品の構成要素に同時代の社会状況が影響する場合がある。本論文ではそうした探偵小説の性質と、占領初期の極めて早い時期から探偵小説が大衆に広く人気を博していたことに着目し、その流行の中心的存在であった『宝石』を対象とした。また、極めて高い発行部数を誇った創刊年の『宝石』の誌面は、江戸川乱歩や横溝正史をはじめとした戦前からの既成作家によって構成されており、敗戦後に確立した新興メディアでありながらも、戦前・戦中の延長線上に位置づけられる側面も持ち合わせていた。本論文ではそうした創刊年の『宝石』の性質にも目を向け、新興メディアとしての『宝石』と、そこに集った既成作家による作品の双方の視点から、一九四六年の『宝石』が捉えた敗戦直後の言説空間の多角的な考察を試みた。

第一章「『宝石』創刊年にみる探偵小説メディアとしての形成」では、「サロン放談」「探偵小説壇」「宝石函」の三コーナーを中心に、一九四六年の『宝石』に掲載された評論や随想を取り上げ、そのメディア形成におけるＧＨＱ／ＳＣＡＰ（General Headquarters, Supreme Commander for the Allied Powers、連合国軍最高司令官総司令部。以下、ＧＨＱ）と米国の影響と、民主化をめぐる同時代言説について論じた。

創刊年の『宝石』では、より推理の面を重視する本格探偵小説を求める傾向にあり、大衆に広く親しまれるジャンルイメージの確立を試みた。幅広い読者層を持つ米国での探偵小説受容の形態はその理想像として度々言及され、ＧＨＱ大尉を招いた座談会を開催するなど、占領下にあった同時代状況を利用した積極的な情報収集が行われていたことが確認できる。一方のＧＨＱも、自国の大衆文化との共通性が高く、民主主義的な文化として認識されていた探偵小説を通して民主主義の浸透を図った形跡がみられ、『宝石』とＧＨＱとの間にはある種の相互利用的関係性が存在していたと考えられる。

こうした考察を踏まえ、本章では、創刊年の『宝石』が、米国を範に取った健全的かつ文化的な本格探偵小説という方針を定めることで、ＧＨＱ主導で民主化が進められた敗戦直後の言説空間の中に探偵小説を位置付けようとしたと結論付けた。しかし、創刊年の『宝石』では、戦前に不健全というレッテルを貼られた変格探偵小説の再掲や、戦時下で人気を博した捕物帳の特集が散見され、それらの企画が読者の大きな反響を呼んでいた事実も見逃すことはできない。

続く第二章以降では、既成作家による同時代を題材とした具体的な作品の分析を通して、彼らが一九四六年の『宝石』の誌面上に捉えた同時代言説の性質について考察した。

第二章「水谷準「ウイルソン夫人の化粧室」論」では、水谷準による短

篇「ウイルソン夫人の化粧室」（『宝石』一九四六年四月）を取り上げ、作中に描かれた敗戦と占領にまつわる同時代言説について論じた。

日本人の「私」が、幼少期に友人である米国人のデニイの家で「真珠の首飾」を盗んだことを、敗戦後に占領軍の将校として再び日本を訪れた彼に打ち明けて謝罪するという寓話的な作品構造からは、占領期日本においてGHQ民間情報教育局が展開した、戦争に対する罪の意識を日本に広く根付かせる「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」の顕著な影響がみられた。しかし、デニイが快く「私」の罪を赦すという結末は、作品発表翌月に開廷した極東国際軍事裁判を通して裁かれた日本の実態とは大きくかけ離れたものであった。

本章では、敗戦直後の日本社会に存在した、敗戦と占領の事実に対する楽観的な言説と、作者である水谷が公職追放の指定を受けていたことに着目し、その二つの事象が組み合わさることで、許されるだろうという希望的観測に基づく結末部の表象が生み出されたと考察した。その考察を踏まえ、「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」の影響と占領に対する楽観的な態度が併存する「ウイルソン夫人の化粧室」は、段階的な変化の途中にあった占領初期の米国観と、敗戦・占領をめぐる言説の形成を捉えた作品であると結論付けた。

第三章「丘丘十郎「蜂矢風子探偵簿」論」では、海野十三が丘丘十郎の筆名で形成した連作短篇小説「蜂矢風子探偵簿」（「沈香事件」『宝石』一九四六年五月／「妻の艶書」『宝石』一九四六年七月）を取り上げ、作中に描かれた女性の社会進出にまつわる同時代言説について論じた。

敗戦直後の日本では、一九四六年に誕生した女性議員や女性警官をはじめ、女性の社会進出に対する関心が高まっていた。「蜂矢風子探偵簿」でも、当時の最新の流行に身を包み、若くして自身の探偵事務所を構える女性探偵の蜂矢風子が「新時代の日本女性」と称されている。しかし、作中で描かれたその実態は極めて非力な存在であり、作者の海野が戦前・戦中に執筆した作品に登場する女性探偵同様に、封建的な性質を帯びていた。

本章では、女性の社会進出がメディアで扱われる一方で、男性の復職や国の失業対策によって女性労働者が職域から追いやられていた同時代状況に着目し、そのねじれた言説空間が、蜂矢風子の人物像の形成に大きく影響を与えたと考察した。その考察を踏まえ、「蜂矢風子探偵簿」は、恣意的に形成された「新時代の日本女性」言説の影で、その否定と、封建的な女性像への回帰が行われた同時代の言説空間の矛盾を捉えた作品であると結論付けた。

第四章「渡辺啓助「盲目人魚」論」では、渡辺啓助の「盲目人魚」（『宝石』一九四六年一〇～一一月）を取り上げ、作中に描かれた復員兵にまつわる同時代言説について論じた。

敗戦直後の日本では、大規模な復員に伴い、生活難に苦しむ復員兵の存在が大きな社会問題となりつつあった。「盲目人魚」では、復員兵を一つのカテゴライズされた存在と捉えずに、その下にある個々人の人物像に迫る表象がみられた。この表象形態は、作者の渡辺が戦時下で発表した「ますらを工房」（『科学と國防　譚海』一九四二年五月）にみられる傷痍軍人表象と共通しており、復員兵に対する偏見を克服する動きが指摘できた。しかし、同時に、敗戦後の復員兵を取り巻いた困難の実態が多く見落とされている一面もみられた。

本章では、近親者をはじめとした復員兵の当事者であるか否かによって彼らを迎え入れる態度が大きく異なっていた同時代状況に着目し、当事者でない「私」によって語られる「盲目人魚」では、復員兵をめぐる事件が一過性の出来事として処理されていると考察した。その考察を踏まえ、後

年の探偵小説に散見される一族の崩壊を象徴する復員兵像とは異なる復員兵の姿を描いた「盲目人魚」は、復員兵の存在が種々雑多な社会混乱の一事象として処理されていた敗戦直後の言説空間の実情を捉えた作品であると結論付けた。

終章では、各章の結論を踏まえ、一九四六年の『宝石』の誌面から浮かび上がる敗戦直後の言説空間の様相について論じた。

創刊年の『宝石』は、民主化に基づいた言説空間の再編成と密接に連動し、本格探偵小説による健全な探偵小説文化の確立という目標に向けたメディア形成を行った。しかし、その一方で、依然として高い人気を誇った捕物帳や変格探偵小説もメディア戦略の一環として用いる傾向もみられた。本論文で扱った既成作家による三作品も、敗戦直後の言説空間の再編成に伴う社会変化をアクチュアルな題材とし、新たな概念や価値基準を作品内に取り入れる動きを見せた。しかし、「ウイルソン夫人の化粧室」では敗戦と占領の実態を楽観視する結末、「蜂矢風子探偵簿」では封建的な女性像への回帰、「盲目人魚」では戦時下の傷痍軍人表象との結びつきが指摘でき、いずれの作品にも、戦前・戦中における概念や価値基準へと帰結する傾向がみられた。

こうした傾向を踏まえ、一九四六年の『宝石』では、敗戦と占領に伴う価値基準の変容の中で戦前・戦中と連続する言説空間が再編成される段階的な変化の序幕を捉えていると結論付けた。

本論文では、各章での考察を通し、明確な痕跡とともに敗戦直後の段階的な言説形成の一端を提示することができた。また、ともすれば乱歩個人の動向に集中する傾向にある敗戦直後の日本社会と日本探偵小説界のかかわりを多少なりとも異なった視点から捉えなおしたことで、占領期研究と日本探偵小説研究の接続可能性も改めて提起した。しかしながら、本論文で扱った対象は極めて限定的なものであった。今後の研究では、本論文を足掛かりにその対象を一九四七年以降の『宝石』へと広げることで、占領期日本における言説空間の再編成について議論を深め、その段階的な変化の明確化を試みる。